



Title	近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識 : 1931-1945年を中心として
Author(s)	内田, 孝
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49475
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【10】				
氏 名	うち だ たかし	内 田 孝		
博士の専攻分野の名称	博 士	（言語文化学）		
学 位 記 番 号	第	2 3 2 3 5	号	
学 位 授 与 年 月 日	平 成	21 年 3 月 24 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当			
	言語社会研究科言語社会専攻			
学 位 論 文 名	近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識－ 1931-1945 年を中心とし			
	て－			
論 文 審 査 委 員	（主査）			
	教 授 青野 繁治			
	（副査）			
	教 授 生田美智子	教 授 角道 正佳	教 授 佐々木 猛	
	准教授 今泉 秀人			

論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、1931年から1945年までの十四年期を中心とした内モンゴル地域におけるモンゴル文学活動を対象として考察を行った。特にこの期間に満洲国、蒙疆政権(蒙古自治邦など)、日本国内において刊行されたモンゴル語の雑誌、新聞、書籍などの出版物の中から翻訳文学作品に着目し、各作品を整理しつつ個別に検討を加え、当時の文学活動の状況を再検討することを目的とした。

「序論」では、まず本論文で扱う研究課題について具体的に述べるとともに、これまで蓄積された先行研究をまとめた。筆者は、内モンゴル地域において近代化への動きが19世紀末以降に開始されたという視点に立ち、19世紀末から本稿で扱う十四年期までを、今日の内モンゴル自治区を含む中国国内でなされている「近代文学」および「現代文学」という二分された文学史区分としてではなくただ「近代文学」と見なす立場をとっている。この時期には活字文化が次第に勃興し、モンゴル文学の重点が口承文学作品から書写文学作品へと移行しつつあり、また、書写文学の中でも日本や欧米の文学作品がモンゴル語に翻訳紹介され始めるといように翻訳文学作品が充実しつつある時代であった。特に近年においては主に内モンゴルにおいて内モンゴル近代文学に対する研究や資料の整備が盛んになってきているとはいうものの、一次資料の不足などが原因となり、この時代の文学活動についてはこれまで十分な研究がなされてこなかった。その中でも翻訳文学作品、当時の翻訳活動については手付かずに近い状態であったといえる。

第1章「出版活動・文学活動の動向」では、満洲国・蒙疆政権の十四年期における文学活動の状況に関し、刊行された雑誌・新聞の種類や出版活動、文学活動団体を取り上げ、この時期の文学状況を論じた。具体的には、第1節「モンゴル文学会」では当時の代表的文学団体である「モンゴル文学会」の活動状況を検討した。彼らは出版文化の向上を目指しており、モンゴル文学会の会誌である『丙寅』誌の内容からは彼らの文学活動の目的が内モンゴル地域における大衆啓蒙、社会改良にあったことが看取される。また、当時翻訳活動を精力的に行いながら創作活動も行い、内モンゴル近代文学の設立者と評価されている詩人サイチンガーの作詩態度を取り上げ、彼の自由詩の中にはそれまでの作詩規律にとらわれず自由な創作を試みようとする近代詩人の精神が反映している点を明らかにした。

第2節「満洲国・蒙疆政権下の雑誌・新聞の出版状況」では、蒙疆政権、満洲国で発行されていた政府系定期刊行物、出版社についてその概要をまとめた。そうした刊行物には、一般大衆や児童に対する啓蒙を目的とした記事や強い民族意識を表出した記事も多く見られた。また、こうした刊行物の中

でも1941年から1945年まで刊行され欠号が少ないモンゴル語新聞『青旗』紙に現われた文学活動に関わる事項を取り上げ、考察を加えた。

第3節「留日モンゴル学生の活動」では、日本に留学していたモンゴル人学生らによって組織運営されていた「留日蒙古同郷会」という団体の活動状況を考察した。今回、筆者の調査により新たに現存が確認された同会の会誌『新蒙古』第1号完全版と第2号を取り上げ、その中の文学作品を含む全体的内容につき考察を行った。その結果、「留日蒙古同郷会」がそれ以前の学生団体とは異なり日本に滞在するモンゴル人が参加する団体に発展していたこと、会誌『新蒙古』の創刊が1941年7月5日であったこと、同郷会には満洲国側および蒙疆政権側の双方のモンゴル人が加入していたが『新蒙古』誌に関しても、同郷会には満洲国側および蒙疆政権側の双方のモンゴル人が加入していたことが確認されること、『新蒙古』を刊行した出版社である文聖舎が保有していたモンゴル語活字の来源を明らかにした。また、これまで知られていなかった文学作品として、留学生ホルチンビリグが民衆のラマ教信仰を題材として創作し、青年世代が新しい学問知識を習得する必要性を呼びかけた戯曲、サイチンガーによる短い翻訳散文(北原白秋、武者小路実篤)が掲載されていたことを確認し、考察を行なった。

第2章「モンゴル語に翻訳された文学作品」では、十四年刊行された雑誌・新聞・書籍の調査の結果、把握したモンゴル語翻訳文学活動に関する考察を行なった。収集した翻訳作品の中にはこれまで知られていなかった翻訳作品も多く含まれ、さらに原作タイトルや原著者名が明記されていない翻訳作品についても、作品の内容から可能な限り原作、原作者を特定するよう努めた。そうした調査の結果、翻訳はタイトルをも含め、原文を尊重した逐語訳が主流であったことが判明した。また、村岡花子が著したイソップ物語集『日本イソップ絵物語』(大日本雄弁会講談社、1933年)、南洋一郎の短編小説「片耳の魔豹」、二反長半の短篇小説「小さな駅の小鳥かご」などの日本語作品がモンゴル語に翻訳されていたこと、エルデムトウグスが翻訳した米国作家ヘンリー・ヴァンダイクの短篇「一握りの土」の出典が山本有三・編『世界名作選2』(日本少国民文庫第15巻、新潮社、1936年)であったこと、日本の民間説話である舌切り雀、竹取物語、笠地蔵が翻訳されていたことなどを明らかにした。一方、欧米文学に関しては、イソップ物語が早い時期から好んで翻訳紹介されていたこと、米国女流作家メアリー・ウィルキンズ・フリーマンの中篇探偵小説「長い腕」、満洲国在住のロシア人作家バイコフの「ざわめく密林」、ドイツのハイゼ作「美しい娘」、リルケ作「キリストの弟子」などが翻訳されていたことを確認した。当時の翻訳文学活動の全体像を見ると、日本語作品の翻訳もしくは日本語翻訳作品からの重訳が多くを占めていることが確認され、そうした作品の翻訳者としては日本留学生もしくは日本で日本人に対するモンゴル語教育に関わっていたモンゴル知識青年である場合が多かった。こうした訳者たちの中には優れた詩人、文学者であったが今日の文学史の中では言及されてこなかった人物も存在することから、そうした訳者の人物像および著作物を調査し、詳細に論述した。日本人翻訳者としては唯一、モンゴル語を学んだ江竜龍太郎が宇野浩二「春を告げる鳥」、芥川龍之介「鼻」という2編の名作を翻訳していたことを確認した。また、訳者たちがロシア語、日本語、漢語を介し欧米の文学作品にまで関心の対象を広げていたこと、外国文学を探究し新しいモンゴル文学を創造しようと試みていた形跡が確認された。この時期には外国の寓話や民話、児童文学、冒険小説、歴史小説、探偵小説、戦争文学、キリスト教文学という多様なジャンルの作品が翻訳されていたことが判明し、日本の侵略支配の下で内モンゴル文学の充実という面も見られはした。1943年にもモンゴル語総合雑誌『大青旗』誌が創刊され中篇や長篇の外国小説の翻訳も増加している。その半面、日本にとって「敵性国家」とされた米国、英国、フランス、さらには中国の文学作品も翻訳紹介されなくなり、さらには軍国主義的、国家主義的要素の強い日本語作品が登場していったのである。

第3章「リンチンホルロー訳『猫の探偵』とその原作」では、この時期の重要な翻訳文学作品の一つとされながらこれまで原典が特定されていなかったリンチンホルローの翻訳作品『猫の探偵』の原作特定と原作と訳文の比較考察を行なった。原作は、上述したメアリー・ウィルキンズ・フリーマン作「長い腕」であり、劉半儂がこの作品を漢語に翻訳し単行本『猫探』(上海中華書局、1917年)として出版し、リンチンホルローはこの漢語訳から重訳していたことを解明した。リンチンホルローの翻訳の意図は、彼が創作した短篇小説同様に、大衆の啓蒙および社会改良という点にあった。

「結論」では本論文の全体を総括した。内モンゴル地域では20世紀を迎えた時期に、近代化への気運が胎動し、近代的教育を受けた知識人、王侯たちはそれぞれが近代化の方向性を模索しながら活動を行った。そうした動きは文学の分野からもしっかりと知ることができ、この時期の内モンゴル人による翻訳文学活動は当時の創作活動同様、モンゴル社会の近代化に不可欠であった大衆啓蒙と社会改

良を目的としていたということが出来る。特に1940年前後になると日本および欧米の文学作品のモンゴル語訳が相次いで現れ、内モンゴル近代文学史、内モンゴル翻訳文学史の上で重要な時期であった。日本語を通じて外国文化のモンゴル社会への移入の努力は、翻訳文学活動という分野に限ってみても明確に見て取ることができる。そして、こうした文化活動は、単に日本文化の移入を目指すのではなく欧米文化の移入をも目指すモンゴル社会近代化への大きな動きの一環として捉えることが可能である。この十四年刊行の内モンゴル地域で刊行された欧米文学作品のモンゴル語翻訳はロシア語、日本語、漢語という3つの言語から重訳されていたことが今回新たに判明したが、これはそのまま20世紀前半期において内モンゴル社会が複雑な近代化の道を歩んできたことを物語っている。

この時期の翻訳者たちは彼ら自身も詩や短篇小説の創作を行っている場合が多く、そうした創作作品と翻訳作品の関係、翻訳作品からの影響については今後さらに研究を行なう必要がある。この時期の彼らの翻訳活動が創作意欲を刺激したことは十分に考えられよう。小説は、詩という文学形式では十分に表現しきれないより複雑なモンゴル社会の現状を映し出し、自らの主観を盛り込むことも可能である。またこの時期、伝統的詩歌の上にモンゴル民族の復興、自己研鑽、大衆啓蒙、社会変革という強い意識・思想性を込め、自由な形式をもつ新しい詩が新たに生み出された。翻訳活動がこれらの創作活動に及ぼした影響は重要な問題である。

さらに今回明らかになったモンゴル文学における翻訳活動を当時の多言語の翻訳と関連させて考察する必要もある。満洲国や蒙疆政権、南京国民政府下の漢語文学、朝鮮半島の朝鮮語文学、その他の日本の侵略が及んでいた地域における各言語の文学との比較、さらに日本国内における海外向け文芸政策の考察を通じ、どの程度の共通性があったのかを把握することが重要である。当時の文芸政策には個別的な面と共通性を有する面とが両立していたはずだからである。モンゴル語に翻訳された文学作品の中にも、一つの作品を同時に複数の言語に翻訳する国家的政策に依拠して翻訳された作品もあったはずである。それを知ること、当時の空間的広がりをもつ植民地文芸政策を理解する上で重要な作業となる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1931年から1945年時期の内モンゴルを対象とし、いわゆる満洲国および満蒙政権下におけるモンゴル人のモンゴル語による文学的表現活動を、モンゴル文学会とその機関紙『丙寅』、満洲国・蒙疆政権下におけるモンゴル語新聞『蒙古新報』、『蒙古報』、『青旗』、留日蒙古同郷会の『漢声』、『新蒙古』と言った一次資料の収集と考察によってあきらかにしようとしたものである。

研究領域としては、従来スポットの当たってこなかった時期と地域を対象としており、その点におけるユニークさは評価できる。また、充分揃えることの難しい資料をできうる限り渉猟し、整理するという煩雑な作業を丹念に行ったことも評価に値する。

外国語からモンゴル語への翻訳という点に的が絞られたため、原作者や原作品の特定という瑣末な事象にとらわれてしまった感もあるが、いくつかの、これまで不明だった原作者や原作の題名などを特定することができた点は、重要な成果であると考えられる。

しかしそのために筆者がもともと中心的に研究していたサイチンガーの活動については、近代詩人としての創作意識を指摘したにとどまり、深い分析をするにまで至らなかったことが惜しまれる。

モンゴルの翻訳者たちは日本語だけでなく、漢語(中国語)にも通じていた可能性があり、漢語資料への注意が十分でなかった点も今後の課題として残るだろう。

まだこの分野の研究は端緒についたばかりであり、今後の研究の深化に貢献できる論文であることは高く評価してよい。

以上により、審査委員は全員一致で、本論文が博士号を授与するに値する論文であると判断した。